

テーマ1：ビジネスコミュニティ

「競争優位のための企業力向上」

～いま求められる人材マネジメント～

■概要

グローバル化の進展や中国・インドに代表されるアジア経済圏の拡大、新会社法やJSOX法への対応など、企業を取り巻く環境は大きく変化しています。このような状況下、企業における競争力の源泉は“やはり”人材にあり、その確保・育成が重要な課題である、との認識が高まりつつあります。一方、2007年問題に象徴されるように、高技能・高技術者の大量退職に伴い、技能・技術をいかに継承していくかも依然として大きな課題となっています。また、ニートやフリーターといった言葉に代表されるように、就労形態や就労意識も多様化しており、特に若年層における人材の流動化も顕著になってきました。企業の現在価値ばかりでなく、その将来価値創出をも担う人材の確保・育成をどのように行うかは、従来にもまして企業における大きな経営課題となっています。

平成19年度のビジネスコミュニティでは、人材確保・育成を含めた人材マネジメントについて、様々な側面からその現状・動向・課題等を俯瞰し、先進企業の事例研究や有識者の講演、参加者によるワークショップなどを通じて、企業の競争力を向上するための人材育成マネジメントのあり方を探っていただきます。

■進め方：ワークショップ形式（7～8回）

【主な研究内容】

- 1：組織力とモチベーション
- 2：組織風土と人材、人材育成（会社と社員とのエンゲージメント）
- 3：ワーク&ライフバランスと人材活用
- 4：女性活用と組織力向上
- 5：人材育成とIT活用
- 6：スペシャリストからプロフェッショナルへの道
- 7：自律人材と学習する組織
- 8：人材確保・育成の観点から参加企業の強み・弱み分析など

■対象者：役員、部長層

テーマ 2 : マネジメントコミュニティ

「これからの情報システム部門の役割と人材育成」

■ 概要

企業における IT の位置づけは、「内なる IT 化」から「外との IT 化」、言い換えると、効率から価値創造へと変化しています。その結果、企業では、経営課題や業務課題を解決できる『IT 企画人材』が一層必要とされてきています。『IT 企画人材』には、IT を活用して自社のビジネスを発展させ、先見性と戦略性を持ってビジネスを変えられる、あるいは経営視点で IT を考えられることが求められます。

これまでの情報システム部門に求められる役割と人材について再確認し、これから重要な役割を担う IT 企画人材とはどのような人材なのか、どのようなスキルが必要か、どうすれば育成できるのか、について考察したいと思います。

コーディネータ 日本ユニシス 人材育成部

■ 進め方 : ワークショップ形式

プログラム概要 (7 回)

- 1 回目 : 情報システム部門の状況 (各社の状況認識)
- 2 回目 : 情報システム部門の役割の変化 (経営視点)
- 3 回目 : これからの情報システム部門に求められる人材像 (UISS の研究)
- 4 回目 : これからの情報システム部門に求められる人材像 (IT 企画人材)
- 5 回目 : 人材育成の状況 (情報システム部門)
- 6 回目 : IT 企画人材の育成方法
- 7 回目 : 人材モデルによる人的資産の可視化と組織力強化
- 8 回目 : グループ研究に関する報告書作成

■ 対象者 :

◇ 経営企画部門, 情報システム部門の方

テーマ 3 : マネジメントコミュニティ

「強固な I T 内部統制の構築に向けた研究」

～内部統制新時代における I T 管理態勢をどう構築するのか～

■概要

元来、I T 統制というものはここまでやれば良いという性質のものではなく、内外の環境の変化も踏まえ、継続的改善を図っていかなければならないものであります。

とはいえ、一方で、J-SOX は時間的に待たなしの状況になってきており、「I T 統制をどこまでやればよいのか？」が、現実の問題となっています。大まかには答えられるものの、残念ながら、この質問に自信を持って答えられる人は見当たりません。ゴールがはっきりしないわけですから、その対応のための方法論もはっきりしたものではありません。

しかしながら、このような状態だからこそ、同じ悩みを持つもの同士が集まり、情報を交換し、知恵を出し合うことの価値があると私たちは考えます。本グループ活動を通じて J-SOX 対応のために、I T 統制をどのように効果的、効率的に構築していくかについて、検討していきたいと思えます。

コーディネーター

廣瀬 渉 (日本ユニシス(株) J-SOX プロジェクト部)

吉武 一 (日本ユニシス(株) ビジネス・イノベーション・オフィス)

■進め方 ワークショップ形式 (8 回)

- 1 回目 : I T 統制についての外部講師講演、認識共有化、進め方討議 (6 月)
- 2 回目 : I T 統制構築に向けた課題、各社の疑問点、問題点の抽出 (7 月)
- 3 回目 : E U C 関連の統制についての外部講師講演 (8 月)
- 4 回目 : I T 統制構築に向けた各社の課題、疑問点等の対応策協議 (9 月)
- 5 回目 : I T 統制評価についての外部講師講演 (10 月)
- 6 回目 : I T 統制評価についての各社の課題、疑問点等の抽出 (11 月)
- 7 回目 : I T 統制評価についての各社の課題、疑問点等の対応策協議 (12 月)
- 8 回目 : グループ研究に関する報告書作成 (1 月)

■対象者 :

□J-SOX を担当される管理者の方、I T 統制を担当される管理者の方等

テーマ 4 : マネジメントコミュニティ

「 I T 部門のあるべき監査対応にむけて」

～情報セキュリティと内部統制の監査への対応～

■ 概要

企業における内部統制への依拠の高まりは、事業の活動が統制、管理、監査の枠組みを基に遂行される証といえます。いまや、コーポレートガバナンス、内部統制、情報セキュリティの三本柱が経営者に求められ、ゆえに、 I T 環境の統制は必須要件です。

そのような環境の中で I T 部門に求められている「 I T 統制に関与する監査」、「情報セキュリティ監査」等を、円滑に実現できる対応力の強化が求められています。

参加企業の I T 部門の監査への具体的な対応状況とあるべき姿のギャップを抽出し、その課題を解決するロードマップの概要を取り纏めることを目標としております。

また、本研究グループのカリキュラムは、各参加メンバーに積極的に調査・発表を行って頂くことにより、監査全体の理解を深めることも目標としております。

■進め方 : ワークショップ形式

- ① 情報システム部門に関与する監査の概要レクチャー (6 月)
- ② 参加メンバーによる「情報システム部門に関与する監査」の調査発表 (7 月)
- ③ 参加各企業の「被監査部門としての情報システム部門の事例研究」 (9 月)
- ④ 情報システム部門に要求される I T 統制 (外部講師を予定) (10 月)
- ⑤ 情報システム部門における「被監査部門としての課題」 (10 月)
- ⑥ 情報システム部門における「被監査部門としてのあるべき姿」の検討 (11 月)
- ⑦ 課題解決に向けての導入アプローチの考案とロードマップの作成 (12 月)
- ⑧ グループ研究報告書作成と評価 (1 月)

■対象者 :

- ◇ I T 部門、情報システム部門、業務企画部門、監査部門、この分野に興味をお持ちの方
- ◇前提知識は、特に必要ありません

テーマ 5 : マネジメントコミュニティ

「情報ライフサイクルマネジメント (ILM) の戦略と適用」

～増え続ける情報をいかに管理するか～

■概要

インターネットを利用した各種新規ビジネスの増加、SAN の普及に伴う IT 利用形態の高度化、及びアプリケーションの多様化により、近年データ容量が年率 50% 以上の高い割合で増加し続けております。また、それらのデータも日本版 SOX 法に代表される法規制により、一定期間保存しなければならなくなりつつあります。このため、昨今ではストレージに関する TCO が注目されております。

増え続けるデータに対応するためのストレージの TCO を可能な限り低く抑える考え方として、情報ライフサイクルマネジメント (ILM) が注目されております。

本グループでは、参加メンバーの方々の企業内に存在するデータとその価値を調べていただき、ストレージの TCO を削減するために ILM の考え方が役に立つのか、また ILM の考え方を取り入れる場合はどのように進めていけば良いのかを検証していただきます。

ストレージの TCO の削減をお考えの方々、増え続けるデータの対応にお悩みの方々の参画をお待ちしております。

■進め方

- 1 回目：リーダ決定、方針策定
- 2 回目：ILM の考え方について討議
- 3 回目：ストレージの TCO 削減方法について討議
- 4 回目：データの価値について討議
- 5 回目：ILM のポリシー決めについて討議
- 6 回目：自社への ILM 適用方法検討
- 7 回目： 同上
- 8 回目：報告書作成
- 9 回目：発表準備

■対象者：

- －増え続けるデータの管理でお悩みの方
- －日本版 SOX 法対応で増加するログの対応でお悩みの方

テーマ 9 : グループ研究

「サプライチェーンにおける IC タグ活用」

～IC タグは業務をどのように変えるのか～

■ 概要

大きな注目と期待がある IC タグは、当初考えられていたよりも導入が進んでいないが現状です。しかしながらコストの低減、技術進歩により、アパレル、家電、航空、出版業界などで、実務運用で稼働して効果を見出している企業も増えてきています。ある調査会社のレポートによると 2010 年には 2,400 億円程度の市場規模になると予測されており、実証実験フェーズから実導入フェーズに移行し、導入が大幅に拡大していくと見込まれています。

本テーマでは、IC タグの活用が最も期待されるロジスティクス分野で、現状の業務とそこの課題を整理し、IC タグを適用した場合どのように業務が変わり効果が見出せるのか検討したいと思います。

■進め方ワークショップ形式 (8 回)

- 1 回目 : 方向性・進め方討議、講演 : IC タグ適用動向 (6 月)
- 2 回目 : IC タグ関連ショールーム、テストセンター等視察 (7 月)
- 3 回目 : IC タグ適用検討を行うモデル (ユーザ) 企業の業務視察 (8 月)
- 4 回目 : モデル企業の業務、課題整理 (9 月)
- 5 回目 : 業務、課題に対する IC タグ適用案・効果検討 1 (10 月)
- 6 回目 : 業務、課題に対する IC タグ適用案・効果検討 2 (11 月)
- 7 回目 : 討議内容の整理、まとめ (12 月)
- 8 回目 : 報告書作成 (1 月)

■対象者 :

- ・物流関連企業、部門で業務改善、IC タグ適用の検討を行っている方

テーマ10：グループ研究

「プロジェクトマネジメントの技術と信頼を得るために」

～プロジェクト目的を達成し、プロジェクトを成功させる為には～

■概要

IT 構築&サービスプロジェクトにおいて、プロジェクトマネジャーは、コスト、品質、納期に責任を持ち、プロジェクトの目的を達成することが求められます。

一方で、納期遅れ、予算オーバー、障害多発等の問題が発生し、当初の予定・想定から大きく逸脱し、最悪は本番稼動に至らない、というケースがあります。

プロジェクトマネジャーとして、目的を達成し、企業価値向上に貢献する為には何が必要でしょうか？何に責任を持ち、どのように運営すべきなのでしょう？

本研究会では、

- ・ 参加者のプロジェクトに関する経験や興味をお互いに共有化します。
- ・ 事例紹介、研究をとおり、プロジェクトの成功と成功要因は何かを議論します。
- ・ プロジェクト管理手法に着目し、仮想プロジェクトで実際に手法を体験します。

プロジェクトマネジャー、または開発責任者、開発企画者として、プロジェクト目的を達成する為には何が必要か、プロジェクトマネジメントの観点で解決の糸口やヒントは何か、考察します。

【研究領域】現在想定している研究領域は以下のとおり。(議論中で絞込み、または見直し)

- ▶ プロジェクトにおける関連ステークホルダ間のコミュニケーション
- ▶ CCPM (Critical Chain Project Management : クリティカルチェーンプロジェクト管理) 手法に基づく、コストオーバー、納期遅延の防止。全体最適化

品質管理の手法 (ゾーン分析、信頼度成長曲線等) 等

■進め方：ワークショップ形式 (7～8回) : 「プロジェクト管理手法」を題材とした場合

1回目：各メンバの問題意識、対応状況確認

2回目：事例紹介～プロジェクトオーナーと開発 PM

3回目：プロジェクトの成功とは何か、最適なプロジェクトマネジメントの検討

4回目：プロジェクト管理手法紹介

5回目：プロジェクト管理手法研究

6回目：プロジェクト管理手法実践

7回目：活動報告全体の流れと骨子確認

8回目：活動報告作成、討議&まとめ

■対象者：

現在あるいは将来、システム開発に携わる方 (企画者、開発責任者、プロジェクトマネジャー等)、この分野に興味をお持ちの方

■キーワード：プロジェクトマネジメント、全体最適、プロジェクト管理手法、CCPM

テーマ 11 : グループ研究

「サーバの仮想化の恩恵」

～仮想化は本当に IT システムにメリットをもたらすのか～

■概要 :

最近、サーバリソースの有効利用、運用管理コストの削減といった恩恵をもたらすとして、『サーバの仮想化』が注目されています。VMware 社の提供する VMware Infrastructure 3、マイクロソフト社の Virtual Server 2005 R2、Xen Source 社の Xen 3.0 など多くの製品が提供されています。また、それに付随して PlateSpin 社や Virtual Iron 社などのベンダーからも多くの関連製品・ツールが提供されています。

本件研究では仮想化関連プロダクトについての研究・検証を通し、サーバ仮想化の現実を把握してメリット・デメリットを明確化することにより、IT インフラへの仮想化導入を検討するに当たっての適用例・判断材料・注意点・考慮すべきポイントをまとめます。

■進め方 : ワークショップ形式 (全 8 回)

- 1 回目: サーバ仮想化市場動向と関連製品概要 (6 月)
- 2 回目: サーバの仮想化方式とメリット・デメリット (7 月)
- 3 回目: 具体的な仮想化適用例 (8 月)
- 4 回目: 現状での課題とサーバの仮想化に当たっての懸念事項 (9 月)
- 5 回目: サーバ仮想化時の懸念事項に対する対策の検討 (10 月)
- 6 回目: サーバ仮想化を導入する場合のアプローチとプランニング (11 月)
- 7 回目: 活動報告書全体の流れと骨子 (12 月)
- 8 回目: 活動報告書作成 (1 月)

■対象者 :

- システム リソースが有効活用されていないとお感じの情報システム部門の方
- サーバの仮想化は怪しくて信用できないとお考えの情報システム部門の方
- 複雑になってきた社内システムを、そろそろ整理・統合しようとお考えの方
- とにかくサーバの仮想化が気になって夜も寝られない方

テーマ 1 2 : グループ研究

「グループウェアの企業情報システムとしての実態と活用」

～改めてグループウェア活用を考える～

■概要：

1990 年代「企業内のコミュニケーションを蜜にし情報の共有を図ることによって企業活動を活性化する」という目標を掲げた第一世代のグループウェアのブームが起こり、多くの企業で導入が進みました。しかし、その結果はどうだったでしょうか。上記の目標を達成できた企業は、ほんの一握りであり、ほとんどの企業では、メール、共有ホルダー、予定表管理、あるいは会議室予約といった断片が導入されただけで終わっていると思われます。最近、Web2.0 というキーワードに関連して、第二世代のグループウェアにスポットが当たり始めています。同じような轍を踏まないためには、第一世代のグループウェアの実態を調査し現状を分析して、その成功要因と失敗要因を把握し、戦略的にグループウェアを活用していくにはどうすればよいかを考える必要があります。

本グループでは、技術的な側面のみならず社会的な側面からも検討を加え、グループウェアを企業に根付かせ戦略的なツールとして活用するための提言をまとめていきたいと考えます。

コーディネータ : 総合技術研究所 3D-VE センター

■進め方 : ワークショップ形式 (全 9 回)

- 1 回目 : キックオフおよび実態調査の進め方の検討
- 2 回目 : 実態調査結果に基づき要因を分析 (成功要因と失敗要因)
- 3-4 回目 : 技術的課題と社会的課題の抽出
- 5 回目 : グループウェアを戦略的に活用するための要件抽出
- 6 回目 : 第二世代グループウェアの調査 (要件を満たすかという視点で)
- 7 回目 : 提言取りまとめ
- 8 回目 : 報告書作成
- 9 回目 : 最終レビュー

■対象者：

情報システム部門、業務企画部門、または、この分野に関心の高い方

テーマ13：グループ研究

「次世代の企業ネットワーク技術を考える」

～ワイヤレス、NGN、センサー、FMC等のビジネスへの活用～

■概要

現在の企業ネットワークにおいては、ブロードバンド・インターネットの隆盛、コンピュータの高性能化・小型化がもたらすネットワークの多様化・高機能化（携帯電話、ワイヤレスネットワーク）やサービス、アーキテクチャ面での進展（NGN(Next Generation Network)、P2P、Web2.0）などの多様で急速な進展が見られています。

今回の活動においては、まず、企業におけるネットワーク技術の変化・進展において、なにに注目すべきで、どのような変化がもたらされるかを洗い出します。そして、洗い出したネットワーク技術をいかに現実の企業情報システム環境へスムーズに適用することができるかについて検討する予定です。

コーディネータ：ユニアデックス（株） 津田喜人、山平哲也

外部アドバイザー：適宜

■進め方：ワークショップ形式（8回）

- 1回目：現在の課題と整理、アプローチの確認
- 2回目：先行事例の調査・研究
- 3回目：アクセスネットワークの変化1（WiFi、ケータイ）
- 4回目：アクセスネットワークの変化2（RFID、センサー）
- 5回目：コアネットワークの変化（セキュリティ、運用管理）
- 6回目：通信サービスの動向と影響1（NGN、FMC）
- 7回目：通信サービスの動向と影響2（Web2.0）
- 8回目：報告書まとめ

■対象者：

企業ネットワークの企画、推進、管理等を担当される方

テーマ 14 : グループ研究

「アプリケーション開発におけるオープンソース Java 開発フレームワーク」活用の検討

■概要

昨今の J a v a アプリケーション開発では、エンドユーザの要求や開発体制に適したフレームワークをいかに選択するかがプロジェクトの成功の鍵を握っているといわれます。オープンソースのフレームワークを採用するプロジェクトも、多く見られるようになりましたが、機能追加した新バージョンは次々リリースされ、おなじような機能範囲の新しいフレームワークも登場しており、プロジェクトにあったフレームワークを適切に選ぶのは難しいと思われまます。

本グループ研究会では、企業のアプリケーション開発プロジェクトのオープンソースフレームワークの現状と課題をさぐり、オープンソースフレームワークの活用の意味を明確化します。

コーディネータ :

商品企画部 OSS Java 企画担当

OSS センター

■進め方： ワークショップ形式（9回）

- 1 回目：オープンソース開発フレームワークの現状理解
- 2 回目：業務システムへの適用における課題抽出と評価軸の決定
- 3～6 回目：プロダクト毎の評価検討（グループ形式）、もしくは想定システムでの適用検証
- 7 回目：評価結果に関する討議
- 8 回目：グループ研究に関する報告書作成
- 9 回目：まとめ

■対象者：

情報システム部門で業務システム開発、IT インフラ基盤の企画をご担当の方

テーマ15：グループ研究

「基幹業務システムに対するオープンソース活用の検討」

■概要

現在、基幹系システムの多くは、メインフレームまたはUNIX等をベースとした商用ソフトウェアの利用が中心であると想定しています。オープンソースは、特にミドルウェアなどについて著名な製品も提供されるようになり、TCOの削減、ベンダーロックインからの開放、またはユーザ様ご自身による保守性の確保などの観点から、オープンソースへの本格的な移行をご検討中であると考えます。しかし、製品の成熟度、サポートに関する不安、利用者教育の問題など、採用を判断するには多くの解決すべき課題をお持ちであると想定しています。本研究では、共通課題をかかえる企業様にて共同でオープンソース適用の利点と課題について整理をいただき、次世代の基幹系システムの基盤選定という視点で、オープンソースの評価、適用までのマイルストーン策定をワークショップ形式で実施していただきます。

コーディネータ

商品企画部 OSS担当

UAL OSS推進部

■進め方： ワークショップ形式（9回）

- 1回目：オープンソースに関する現状確認
- 2回目：業務システムへの適用における課題抽出と評価軸の決定
- 3回目：適用事例および、研究対象の製品選定
- 4回目～6回目：プロダクト毎の評価検討（グループ形式）
- 7回目：評価結果に関する討議
- 8回目：グループ研究に関する報告書作成
- 9回目：まとめ

■対象者：

情報システム部門で戦略策定、システムインフラ選定に従事されている方

テーマ16：グループ研究

「システムの開発、運用におけるセキュリティ」

～システムの開発や運用に携わる方が考えなければならないセキュリティ対策とは～

■概要

SI企業は、システム開発などを通じて顧客の様々な情報に関与します。そのため、自社内の情報セキュリティ確保のみならず、全ての顧客に対して情報セキュリティを確保してシステムを提供する必要があります。

システムの開発や運用において、検討し実施が必要なセキュリティ対策には、技術的な対応、人的な対応、物理的な対応等、範囲が広いのです。

【研究領域】

- システム開発・運用におけるセキュリティとは？
- 開発環境のセキュリティ
- アプリケーション開発の開発工程におけるセキュリティ
- ネットワーク構築、インフラ構築におけるセキュリティ
- セキュアなシステム運用

など

本研究では、システムの開発、運用におけるセキュリティ対策を整理し、強化を図るためのポイントについて研究します。

■進め方

(例)

- 1回目：システム開発・運用におけるセキュリティについて(6月)
- 2回目：セキュリティ対策の分類と対策例について(7月)
- 3回目：研究テーマの検討(8月)
- 4回目～：【9月～1月】研究活動および報告書作成
【2月】発表資料作成

■対象者：

現在あるいは将来、情報システムの企画、管理、構築、運用保守に携わる方。

テーマ 17 : グループ研究

「プロトタイピング手法による企業情報システムの迅速な構築」

～LINC2000 を後継する情報システム開発ツールを使用したシステム開発手法～

■概要

情報システムの構築、とくにオンライン プログラムにおいて、プロトタイピングによるソフトウェア開発が有効な手法の一つとして挙げられます。プロトタイピング手法によるソフトウェア開発では、ユーザーのニーズをすばやくプロトタイプ システムに反映させるため、以下の機能が必要とされます。

- ビジネス ロジックを簡潔に表現できるスクリプト言語
- 変更を情報システムにすばやく反映できる変更管理およびビルド配置方式
- ビジネス ロジックの問題点をすばやく特定するインタプリタ/デバッグ機能

日本ユニシスの情報システム開発ツールである AB Suite (Agile Business Suite) では、UML によるビジネス モデリングから、オブジェクト指向スクリプト言語によるビジネスロジック記述とインタプリタ実行、およびワン クリックでのビルド/配置により、プロトタイピング手法による企業情報システムの迅速な構築が可能です。

本テーマでは、AB Suite を利用した情報システムの迅速な開発手法を、ワークショップを通じて研究していただきます。

コーディネータ : ユニアドックス株式会社 EIT サービス統括部

池田義和

河野喜之

■進め方 : ワークショップ形式 (9 回)

- 1 回目 : AB Suite 紹介
- 2 回目 : AB Suite プログラミング講習 基礎編
- 3 回目 : AB Suite プログラミング講習 応用編
- 4 回目 : サンプル システムの検討
- 5 回目 : サンプル システムの要件定義
- 6 回目 : サンプル システムのプロトタイプ
- 7 回目 : サンプル システムのプロトタイプ
- 8 回目 : プロトタイプの評価
- 9 回目 : 報告書作成

■対象者 :

LINC または LINC2000 でのシステム開発/保守のご経験、ご興味のある方。

テーマ 18 : グループ研究

「IT 技術者の仕事」

～企業人 3 年～4 年生に向け、役に立つテーマ～

■概要

IT 技術者とはどのような仕事を生業とするのか。情報システム部門に所属する若き技術者に情報システムに係わる広範囲な技術解説とその活用の意味を鳥瞰し、テーマを次の 4 つの分野に分け展開いたします。

1. IT をめぐる新しい動き 2. SE の仕事 3. SE の心得 4. SE が持つべき基本
使用テキストとして、平成 19 年 4 月発刊の「SE 読本」(オーム社、妹尾・工藤 共編)を使用し、この本の作者でもある前田からテーマごとの紹介・解説を行い、その後で全員で討議を行いながら進めます。また、特に参加者の興味の高いテーマについては外部アドバイザーも加えた特別講義も柔軟に実施したい。参加者に特に前提知識は必要としないが、討議を通して技術の理解を深めていただき、将来の仕事に向けた指針を持つことが出来るようにも心掛けていきたいと思えます。

■進め方

1 回目 : ガイダンス

2～3 回目 : IT をめぐる新しい動き

- ・経営と IT・企業の全体最適を目指す EA・SOA で具体化するコンポーネント・システム開発
- ・身近な社会問題「個人情報セキュリティ」・オープン・ソース・ソフトウェア (OSS) への期待

4～5 回目 : SE の仕事

- ・プロジェクト参加の第一歩は作業報告 ・標準化は仕事を円滑に進める基本
- ・プロジェクト成功の鍵 ・正確な見積もりが出来て一人前
- ・テスト計画軽視のツケはあなたが払う

6～7 回目 : SE の心得

- ・ストレスと上手につき合う方法・聴き上手は学び上手・キャリアパスは計画的に、継続的に資格取得にチャレンジ ・IT 技術者の基本倫理

8～9 回目 : SE の持つべき基本

- ・競争優位を実現するデータウェアハウス ・グローバル・スタンダードの動向
- ・効果的なシステム作りには適切な開発方式をシステムにはライフサイクルがある

10 回目 : 報告書のまとめ

* 2 回目と、9 回目に一泊の合宿を予定 (参加者の方は有料となります。)

■対象者 : 情報システム部門の 3～4 年生。女性の方も歓迎です。

テーマ 19 : グループ研究

「企業人として社会にできることーCSR から SR へー」

■ 概要

情報システムが企業の中で果たす役割は非常に重要になっていますが、情報システムを支える人材のモデルは情報技術よりであり、本来企業人として考える必要のある社会責任やワークライフ・バランスについての IS 部門としての考え方は示されてきていません。経済産業省が示している ITSS (http://www.ipa.go.jp/jinzai/itss/download_V2_2006.html) や JUAS (日本情報システムユーザ協会 <http://www.juas.or.jp/>) が提示している IT ユーザ企業としての人材モデル UISS でも特に記述がないのが実情です。企業としての社会責任は近年 CSR 活動と言う形で表れてきており、法令遵守のコンプライアンス的側面から、社員のやる気や環境推進、社会貢献などの活動にシフトしてきております。過剰時間労働やメンタルヘルス問題を抱える情報システム部門としても、問題対応だけでなく、IT による環境推進や、WEB とイントラネット活用による社内外コミュニケーション向上など、部門として、そして IT 人材の企業人としての SR (社会的責任) を考えてみる必要があるのではないのでしょうか。情報システム部門や経営企画部門などに在席する若手社員を対象に、「情報システム部門、経営企画部門としての SR」を一緒に考えてみたいと思います。

■ 進め方

日本ユニシス株式会社 CSR 推進部メンバーから次のような紹介をした後、それらをたたき台にして本テーマについて意見交換することを中心とします。

1. 日本ユニシスグループが進めるCSR活動ー「ITが人と社会にできること」
2. 読まれるCSR報告書の作り方ー読みやすい、分かりやすい、読んでみたいー
3. 社内コミュニケーション向上ーイントラネットとコミュニティ活用ー
4. 紙の文書を作り出さない環境推進活動ー電子文書化推進とワークフロー化ー
5. 効果的なIR活動と情報開示ー開かれた会社になるためには何が必要かー
6. 顧客満足度 (CS) 向上と従業員モチベーション (EM) 向上ーEMなくしてCSなしー
7. ワークライフ・バランスのすすめー「会社を成長させるバランス人間」へー
8. 企業の身の丈にあった社会貢献活動を進めるにはーらしさ、首尾一貫、そして持続することー

■ 対象者 30歳代前後の

- ・企業の情報システム部門における今後の情報システム戦略を策定する方
- ・経営企画部門でCSRのあり方について検討する方
- ・企業の社会好意形成について興味がある方

